

男女共同参画ランチョンワークショップ

「優れた科学の芽を皆でサポートするために」 ～ 北海道大学の実践に学ぶ ～

日 時：9月21日（火）12：30～13：30

会 場：北海道大学高等教育機能開発総合センター

S 講義棟 S 2 教室

世話人：日本遺伝学会男女共同参画推進特別委員会

北海道大学女性研究者支援室

2008年の大会から始まったこのワークショップのシリーズでは、これからの活躍が期待される女性研究者を支援する方策を探るために、海外を含め、さまざまな立場での体験や支援活動の実際を紹介することにより、女性研究者が出会う多種多様な問題について考える機会を提供してきた。そのなかから、女性研究者支援は、男性も含めた若手研究者支援と切り離しては考えることができないことが浮かび上がっている。本ワークショップは、北海道大学における女性研究者支援室の活動について知る機会とし、実際にさまざまな支援を受けた方の経験談も交えて、キャリアアップに向けた具体的な支援の有効性について考えてみたい。

（司会：松浦 悦子 日本遺伝学会男女共同参画推進担当特別幹事）

1 はじめに

五條堀 孝（日本遺伝学会会長）

2 パネルディスカッション

★ 女性研究者の活躍促進：支援から育成へ

有賀 早苗（北海道大学大学院農学研究院／女性研究者支援室室長）

第3期科学技術基本計画に女性研究者の活躍促進が数値目標付きで明示されたことを受けて始まった科学技術振興調整費による女性研究者支援事業も、環境整備に重点を置く「女性研究者支援モデル育成」プログラムから、モデル育成プログラムで整備された環境・意識改革を前提に、女性比率の際立って低い理学・工学・農学系分野への女性研究者定着に的を絞った「女性研究者養成システム改革加速」プログラムへと展開し、キャリア継続からキャリアアップへと向かっています。2つのプログラムで本当に必要かつ有効な支援が推進できたかを北大の事例から検証しつつ、第4期に向けて女性に限らず若手研究人材育成に女性研究者支援の視点・経験を活かしていきたい。

★ 「不安」を取り除くサポートの充実を

黒岩 麻里（北海道大学大学院理学研究院）

毎日がめまぐるしいスピードで過ぎていく。とにかく時間が足りない。余裕のない自分に、良い研究、教育、子育てができているのか、常に不安がつきまとう。研究も育児も苦勞はつきものであるが、苦勞しながらも有意義なものにしていくために、サポート環境の充実が必須であると強く感じる。また、男女にかかわらず、昨今の大学教員には業務が多すぎる。皆、忙しすぎるのだ。たとえ優秀な人材であっても、能力を発揮できなければ意味がない。組織だった仕事の効率化こそが、優れた若手研究者が活躍できる場を提供できる。ワークショップでは、北海道大学で実際に受けているサポートの内容をお話するとともに、日々思う事を元に、今後取り組むべき課題を提案したい。

★ 研究生活 15 年＞結婚生活 11 年＞同居 3 年

小柳 香奈子（北海道大学大学院情報科学研究科）

博士課程に進むか、結婚はするか、子供はいつ産むか、ポストをどこで得るか。これらの選択は、特に女性研究者にとって悩ましいものであるが、長期的な見通しがたらず、その時々で最善の選択をするしかない。私の場合そのような選択を積み重ねていった結果、博士課程で学生結婚をして 11 年（うち同居期間 3 年）、現在 3 歳の娘と 2 人暮らしをしながら大学教員として勤務するに至っている。このような選択が可能だったのは、ひとえに周囲の理解と様々な支援があるからに他ならない。このワークショップでは、ここに至る過程で実際に困ったこと、ありがたかったこと、感じたことなどをお話ししたいと思う。自分がよいロールモデルであるのか、私の研究人生はまだまだ途上にあるが、人生の岐路で決断に迷っている若い女性研究者の皆さんの背中を後押しできれば幸いである。

3 おわりに

高木 信夫（日本遺伝学会第 82 回大会委員長）